

---

# バカと美少女とFクラス ～プロローグ～

小南冬知亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと美少女とFクラス      ～プロローグ～

### 【Nコード】

N 6 7 4 4 Y

### 【作者名】

小南冬知亜

### 【あらすじ】

ある日の放課後から始まる、謎の美少女登場シーンです。

現れてすぐに明久にキスをした美少女は一体何者なのか？  
現場を見たFクラスのみんなはどうしたのか？

これはプロローグと言う名ですが、続くか分かりません。  
でも、おそらくこれ一本でも大丈夫なようになっているはずです。

雄二視点で語られる、とある日のお話。  
お楽しみ下さい。

## （前書き）

本編を読む前の諸注意

素人のため、分かりにくい部分があると思います。ご了承下さい。

キャラが違う！と思われる場面があるかと思われます。よろしければご指摘願います。

プロローグですが、続くかどうかは分かりません。

駄文ですが、最後までお読みいただけると幸いです。  
では本編へ・・・

「明久、これからみんなでマクナルドに行くんだが」

放課後、Fクラスのいつもの面々での帰り道。

そこで、俺、坂本雄二は悪友の吉井明久に声をかけた。

まあ、明久がこの誘いにつてこないはずはない・・・

「ゴメン。今日はちよつと無理なんだ」

はっ？誘いを断ったって？

「もしかしてまたゲームを買ったからお金がないのかの？少しならわしが奢ってあげるぞ？」

美少女・・・いや、美少年で演劇部期待のホープの木下秀吉が独特の話方で口を挟む。最も、誰がみても女の子が気をきかせて男の子の負担を減らそうとしているようにしか見えないが。

でも、なるほどな・・・

それならありえる・・・

「ありがとう秀吉。でも本当に無理なんだ。それに男として今の申し出は受けるわけにはいかないよ」

「最後の部分がよく分からんが」「明久／＼アキ／＼吉井くんが食べ物奢りを断っただと／＼ですって／＼なんて！！！！」

秀吉の言葉を途中で遮る。

島田美波、姫路瑞希も俺と同じ考えだったらしい。

あの明久が？

普段、塩、水、砂糖、油だけで生活しているようなものな明久が？

「ちよつと！なんで3人同時に同じ事言つのさ！まるで僕が奢りならいくらでも食べるみたいじゃないか！」

まさにその通りなんだが？

「っ！そんな事な「明久」！！！」・・・葵！？」

向こうから走ってきた女の子が明久に抱きつく。

そして、なんと、キスをした。

・・・挨拶のような頬に軽く触れるだけのものだったが。

「「「な・・・！！！」」」」

姫路、島田、秀吉の3人も絶句している・・・ムツツリーニこと土屋康太は・・・放っておこう。

驚いた事に明久からもしていたのだが、びっくりすぎて4人は見ていなかったらしい・・・

かく言う俺もびっくりしすぎてその後、走ってきた女の子と明久が何か話していたのを聴き取れなかったのだが。

「と言う訳で僕は帰るから。また明日、学校で！」

なにが「と言う訳」なのか全く分からんが、女の子——明久は葵  
って言ってたから葵って名なのだろう——と明久は帰っていった。  
・

が、問題はコツチで・・・

かなり殺気だっていた。

特に姫路と島田だが、何故か現れた須川もだった・・・

「姫路、島田、落ち着け。須川もだ。今行ったところで何にもならないだろう。明久は、また明日、って言っただ。明日学校で異端審問会を開いて、公平に判断しよう。」

とりあえず明久の延命をはかる。

「・・・た、確かにそうね。今行ったところであの女が誰かも分からないし、腕一本くらいしか無理ね」

腕一本って・・・折るつもりか？島田・・・

「そうですね、明日きっちり聞き出す方がいいですよね」

姫路・・・なんだか黒い影が巨大化しているのだが・・・

「よし！総員、明日学校で異端審問会を開く！」

『おゝ！！！！』

「FFF団の信条！異端者には？」

『死の鉄槌を！』

「男とは？」

『愛を捨て、哀に生きるもの!』

「よし!では明日、朝一でおこつ。遅れないように!」

『おおおお!』

・・・なんでFクラスの男子がみんないるんだ?しかもすでに覆面  
姿だし・・・

まあ、いいか・・・

異端審問会に参加するつもりは無いけど、あの葵とかいう女の子の  
ことは気になるから・・・

ガラッ「おはヨ」「異端者を取り押さえる!」はっ?ちよつと!!!」  
明久が入ってきた瞬間にはりつけにされている。

「なに!ぼくがなにしたっていうのさ!」

はりつけにされたままわめいているが・・・そんなのを気にするF  
FF団ではなく・・・

「これより異端審問会を開く!異端者には?」

『死の鉄槌を!』

「男とは?」

『愛を捨て、哀に生きるもの!』

「・・・罪状を読み上げたまえ」

「はっ。須川会長。えー、被告、吉井明久(以下この者をバカとす  
る)は、我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我  
らが数理に反した疑いがある。バカの罪状は、昨日の下校途中で謎



の美少女に抱きつかれ、キスをされた「御託はいい。結論だけを述べたまえ」うらやましいのであります！」

「うむ」

「ちよつと！どいうことさ！葵は「あき／吉井くん？」美波も姫路さんも凄く黒いオーラがただよってるよ！？」

はぁ・・・やっぱり2人は危ないな・・・すでに関節技をかけようとしている・・・

さすがに止めた方がいいか

「おい、島田、姫路、そんなことしたら」（ガラッ）明久！・・・なに、してるの？」

止めようとしたら、昨日の子が入ってきた・・・文月学園の制服をきて。

「ちようどよかった！葵、助けてくれない？」

「いいけど・・・その2人離れてくれないかな？怪我するから」

本当、何者なんだ？この殺気。只者じゃない。なにせ、島田達が大入しく明久から離れるくらいの気を放出しているのだ。『普通の』高校生ではない。

そんなことを考えていたら、彼女は明久の前に立ち、腕をクロスさせて・・・

斬！

腕が動いた・・・のだと思う。

見えたのは、動き終わった手と、パサリと落ちたロープだけだった

からなんとも言えないが。

「「「・・・・・・」」」

しばらく時間が止まった。

「でも、また斬れ味よくなったんじゃない？葵」

「そうかな？」

「そうだよ。力加減も絶妙だった。」

「本当？よかった！明久を怪我させたら、玲姉さんに怒られそうだからね・・・」

・・・明久と少女を除いて。

「なあ、明久。きいてもいいか？」

復活した俺は、とりあえず明久に声をかけた。

「なに？雄二」

「そいつは誰だ？」

「えっ！ああ、葵のこと？」

他に誰がいる？

「えっと、葵は僕の「明久の妹です」・・・双子の、ね」

・・・い、妹！！！

しかも双子！！！！

「はい、坂本雄二くんですよ？明久から話はきいています。Fクラスの皆さんのことも」

凄くカワイイ笑顔で言ってくれたが、みなフリーズしていて聞こえていない。

・・・あ、ムツツリーニはカメラを構えていた・・・

「葵。あんまり・・・」

「わかってる。でも、1週間なんだから、ね？」

「ま、まあ、葵が気をつけるんならいいけど・・・」

どうも、明久はFクラスの連中が妹さんに手を出さないか心配らしいな。

まあ、このクラスにはFFF団があるから大丈夫だとは思うが。

「葵さん、1週間ってどういうことだ？それにその制服」

「私、今、玲姉さんの母校の大学の1年なんです。だから、あんまり長くこっちにいらなくて・・・でも、明久が文月学園の学園長に頼んでくれたので、短い間ですが、このクラスで暮らせることになったんです！」

玲さんの母校って・・・かの超有名なあの大学か！？飛び級制度のあるアメリカだが、日本人の高校生が入っていたとは。

・・・てことは明久の家でバカなのは明久だけ、ってことが・・・

「「なんだ、妹さんだったの／＼ですね」」

今になって妹の話をし出した島田&姫路。

まあ、明久の生存可能時間が伸びたってことでいいか。

「ん？葵どの、まさか声優の『吉井葵』では・・・」

「そうよ。高校生でも知ってる方がいるなんて思わなかった！」

「知ってるもなにも・・・」

「そうだったね。秀吉くんは演劇やってるからか・・・もう少し頑張らなくちゃ！」

「いや！わしはもう十分凄いと思うのじゃ！あまり無理するのはいけないのじゃ」

「無理なんてしてないよ。だって、今主役賣ってるの3本だけだし、ラジオも5本しかやってないし・・・」

「それを無理してないというの？葵。ただでさえ論文書いたりとかして忙しいのに、そんな仕事いれて・・・」

明久の言うとおりだと俺も思う。

だいたい、主役3本ってことは、準主役とか脇役ではもっとあるのだろう。十分忙しいはずだ。

「それに、舞台の仕事までいれて」

はっ？学生業に声優業だけでなく、女優もやってるってのか！？

「いいじゃない！楽しいんだもん！」

「凄いのお。わしももっと頑張らなくては」

「あ、じゃあ今度一緒に練習する？私でよければ」

「本当か！ぜひお願いしたいのじゃ」

同じ舞台人同士、気の合うところがあるのだろうか？  
秀吉と葵さんは以外といい組み合わせに見える。

「あ、あのお・・・」

「なあに？須川くん？」

FFF団がいつのまにか覆面を外している。

「その・・・もしかして、今、ウェブ上で人気の歌手の『吉井葵さん』では・・・」

「そうよ！知ってるの？」

「ちよつと！葵！？まさかまた仕事増やしたの！？」

「いいじゃん、だって、日常ってつまんだもん」

「だからって、葵が倒れちゃったら意味ないんだよ！！」

仲いいんだな、こいつら。

ところで歌手ってどういうことだ？

「・・・吉井葵は今、人気急上昇中のウェブアーティスト。  
つまり、ウェブ上で歌う歌手ってことか、ムツリーニ？」

「・・・そうだ。特に高音と容姿が綺麗なので売れている。  
なるほどね。」

でも、そろそろ撮影はやめた方がいいんじゃないか？  
きつと鉄人がくっ（ガラッ）席につけ」

本当にきた・・・

「まあ、どうも先に紹介されてるみたいだが、自己紹介をしてくれ」  
鉄人に促され、自己紹介をする葵さん。

「吉井葵（よしいあおい）です。さっき言いましたが、吉井明久の双子の妹です。今は、アメリカの大学の1年ですが、声優、女優、歌手、作家、ダンサー・・・まあ、いろいろやっています。特技は、素手でものを切断することです！兄ともどもよろしく願います」  
謎な部分も多々あるが・・・まあいいか。

この時おれは何かひと騒動ありそうな予感がした。  
その予感が的中したのか、はたまたタダの思い過ごしだったのかは・・・  
また後日、話せたら話そう。

**（後書き）**

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

ご意見がございましたら、遠慮なくお申し出下さい。

本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6744y/>

---

バカと美少女とFクラス ～プロローグ～

2011年11月20日17時20分発行